



保育の中の物語(8)

ゆるやかな境界線

↓ 降園前の遊びから考えたこと ↓

岸井慶子

昼食後の五歳児。U子とI子が保育室で楽器遊びを始めた。ベルが二本とスズが二つ。そして机の上にはタンバリン。「ドドソソララソ……、あっ、間違えた、もう一度」一音階ごとに楽器を変えている。実に楽しそうな表情だ。

同じ室内では、四々五人の女兒がカセットで音楽をかけ、歌ったり合奏したりしていたが、M子とS子が残った。M子はミュージックケルを目の前にずらりと並べ、一人で演奏することに夢中だ。背後から聞こえるU子らの楽しそうな声が邪魔になるらしい。そのたびに「ん、もうっ」とU子らのほうを振り返ってにらみつける。U子らはそのことに気づき、声を低くする。しかし、ついつい大きな音や笑い声をあげてしまう。すると、M子は席を立って、U子たちの



所へ行き「大きな音を出さないで」と言う。U子、I子は黙ってうなずく。

少しして、今度はU子がM子の所に行き、「ねえねえMちゃん、小さい声で歌うからいいかな。このくらいの声ならいい？」と遠慮がちに聞く。M子は座ったまま「そうね」と当然のように応じ、胸を手で押さえながら「心の中で歌ってよ」と言う。U子は「わかった」と言い大きくうなずく（ここで筆者は「そんな、M子は自分勝手ではないか。なぜU子たちは遠慮するの」と思う）。

そのとき、近くで紙剣を作っていたA男が「そんなの、無理でしょ。できないかもしれないよ」ときっぱり言う（そのとおり。よくぞ言ってくれたA君。違うことをしていても、ちゃんと聞いているのね）。しかし、U子は何事もなかったかのように自分たちの場所に戻り、I子と合奏を始める。M子も再びベルに向かう（あれあれ、なんで無視したの。A君の存在感は薄いのかしら）。

その後、U子とI子が「もつとベルを貸してほしい。Mちゃんばかりたくさん使っているけれど、私たちも使いたい」とM子たちに抗議するが、M子は全く譲らない。初めの仲間も戻り、担任と一緒に話し合った。五歳児らしい、いろいろな「理由」「条件」「経過説明」が出て「三曲終わったら貸す」というところにやっと落ち着いた。

さて、その三曲の最後の一曲を何にするか決めかねているその時、例のA男



がふーっとその輪に入ってくる。前から参加していたかのように「デンジマン（注テレビアニメ主題歌）がいいよ。おれ、デンジマン、好きなんだよなあ」と感じと身体をくねらせながら大きな声で言う。いかにも「好きなんだなあ」と感じさせるA男の希望は、すんなり受け入れられた。「デンジマン」の曲の順番がくるまで、A男は合奏の仲間に入る。いよいよ曲がかかると、A男は踊りだす。夢中になって、しだいに回りが見えないうちに「なりきって」踊る。その表情からは「恍惚^{こうこつ}」状態さえ感じられる。女兒たちも一緒にリズムを取ったり、歌ったりして楽しんでいる。動きはテレビなどの映像から覚えたのだから、デンジマン自身の動きとは左右逆転、鏡の関係（この真剣さがたまらない）。デンジマンの曲が流れると、室内にいたほかの男児もそろそろと集まってくる。興味があるのだろう。女兒だけの楽器遊びにいつの間にか男児が参加した。境界線を越えて流れ出す「音」のもつ特性を感じる。積み木や楽器のように、使っている子どももの使用権が明確な「物」とは違う特性だ。「遊びの伝播」を遊びの「質」から検討してみたくなる。

S子に焦点を当ててみよう。S子はこの一連の流れの間、何度も何度もベルに手を伸ばし、奏でようとするがかなわない。M子と同じグループにいるのだが、S子に許されているのはタンバリンのみ。M子が後ろを向いたり、席を離



れたりする時（たとえば、U子たちにもう少し声を小さくしてほしいと言いに
行く時など）、S子は急いでM子の使っているベルに手を伸ばす。時には手に
持つが、すぐにM子から取り戻される。担任がそばにきた時は少々抵抗し、す
ぐには返さない。しかし結局は、M子のやさしいけれど、強引な態度で取り返
されてしまう。では、S子はやってみたいベルを手に入れようと、涙ぐましい
努力をしているけなげでかわいそうな女児なのだろうか。一度もベルを奏でる
ことができない子なのだろうか（筆者は初め、そう思っていた）。ここで取り上
げた昼食後の時間帯ではそうだ。しかし、VTRによれば午前中、S子は一人
で思い切りベルを独り占めして奏でていた。

M子についても考えてみよう。M子は「ドレミの歌」を奏でようと真剣に試
行錯誤していた。ベルの持ち方や置き方を変えて、音程の違いを確認している。
筆者は初め、M子の「独り占め」や「強引さ」に注目したが、M子にとって、
ベルは音階全部がそろっていないければ意味をなさない。

それぞれの物語が交差する降園前のひと時。その子の思いや、それまでの流
れ、観察者自身の思いによって、物語の意味が変わることに気づかされた。ま
た、活動と活動、仲間とそれ以外、私の物と人の物、などの「境界線」の緩や
かさについて考えさせられた事例だ。

（鎌倉女子大学短期大学部教授）